

「だ」って捉えることもできたでしょう。でも、影には光もある。では「がん宣告」を受けなかつた

「命はそんなにやわじゃない」って感覚しありません。ある仏教者のことばに「人は大いなる生命に包まれて、生かされ、生かされている」とありました。僕も、いろんな世間に包まれ、生かされて、ここまで来られた：そんな感覚です。

「最近つくづく思うのは「起きた出来事は変わらないけれど、その出来事をどう捉えるか、で人生はすごく変わる」と。がんって、すごく恐ろしくて、多くの人が言っているように「悲劇だ」って捉えることもできたでしょう。でも、影には光もある。では「がん宣告」を受けなかつた

## ●「2年後に生きている可能性ゼロ」と宣告されて

僕は、いろいろ教えてもらい、気づかされたことを、おすそ分けする気持ちで活動しています。がんは今から20年前に発症、28歳でした。腎臓を覆うぐらいの大きさになっていました。調べると、非常に珍しく、子どもの脳にできやすいタイプの肉腫とされ、当時、全国で20例しかない希少性のがん。治療法は確立されていません。主治医は両親だけを呼び、「早くて半年の命：」「2年後に生きている可能性はゼロ：」と、宣告したのでした。僕には「普通の腎臓がんと違って、再発する可能性が高い」と言われただけです。その僕が、こうして生きて今年で20年です。20年経って、病前より元気で幸せに生きています。

命は誰もがいつかは終わります。だから、病気が治ったら勝ちで、治らなかつたら負け、といった世界ではないと思います。同じような難病に苦しむ仲間を見送ったこともありましたが、彼らも、負けたのではなく、それぞれの人生を精いっぱい生きたんだなあ、と思っています。僕は「生かされた」って感覚しありません。ある仏教者のことばに「人は大いなる生命に包まれ、生かされ、生かされている」とありました。僕も、いろんな世間に包まれ、生かされて、ここまで来られた：そんな感覚です。

最近つくづく思うのは「起きた出来事は変わらないけれど、その出来事をどう捉えるか、で人生はすごく変わる」と。がんって、すごく恐ろしくて、多くの人が言っているように「悲劇だ」って捉えることもできたでしょう。でも、影には光もある。では「がん宣告」を受けなかつた

講演

# 命はそんなにやわじゃない

## ～がん余命半年から20年を迎えて

『メッセンジャー』編集長 杉浦貴之  
シンガーソングライター



2月9日に開かれた「第623回おてつき文化講座」から要旨を採録しました。



杉浦貴之（すぎうら たかゆき）

1971(昭和46)年、愛知県生まれ、岡崎市在住。1999(平成11)年、進行性の腎臓がん宣告を受ける。2005年、雑誌『メッセンジャー』創刊。同年12月、ホノルルマラソン出場。2010年から2018年までがんサバイバーホノルルマラソン主宰。トークライブや小中学校などでの講演に全国を駆け回っている。著書に『命はそんなにやわじゃない』。